

D's Mind

医の道をつなぐ

松岡良典

医療法人E.M.S 松岡救急クリニック 院長

（ご自身の声）

常に患者さんのニーズに耳を傾ける。
その姿勢を崩さずに歩んだ救急医が、
見出だした地域医療のかたち。

鹿児島県南部、南九州市に2013年に誕生した松岡救急クリニックは、
4床の有床診療所が24時間体制で救急を受け入れる運営で注目される。
しかし、同院を運営する若き救急医の医療理念は、
「救急」のトピックだけでは語りきれない。

救急告示指定医療機関であり、かかりつけ医であり、医療連携の要であり……。
羅列し始めればファクターの数に際限がなくなってしまう。
その医療は、「患者さんの求める」というキーワードなしでは
理解できないものだった。

PROFILE 松岡 良典

1979年 福岡県久留米市に生まれる
2003年3月 佐賀大学医学部卒業
2010年3月 九州大学大学院医学系学府機能制御医学専攻博士課程修了
2013年3月 九州大学病院救命救急センター勤務、
佐賀大学医学部附属病院麻酔・蘇生学講師、
同集中治療部副部長などを経て、
松岡救急クリニック開院

<所属学会>
日本救急医学会
日本整形外科学会
日本脳卒中学会
日本集中治療医学会
日本整形外科学会
日本麻酔科学会

カーナビの誤差がもたらしてくれた
地域に愛され、頼られるクリニックの輪郭

取材チームは、JR鹿児島中央駅近くでレンタカーに乗り込み指宿有料道路を南下、40分ほどの時間を費やして目的地に着いたはずだった。しかし、カーナビに何らかの誤差が生まれたらしく、モニターには目的地到着のお知らせが点滅しているものの、実際には見渡す限りの田畑。めざす、南九州市川辺町であるのに疑いはないが、道路沿いに幼稚園が所在するだけの風景に呆然とさせられた。若干の焦燥を覚えつつ、園庭で園児を見守っていた職員の一ひとりに道を尋ねると、瞬時に答えが返ってきた。

最後に選んだ左への分岐が間違っていたらしい。来た道を逆進し、国道225号線に戻ると延々数分で左手に松岡救急クリニックが姿を現した。

このエピソードに対して、「ああ、はい」から始まった松岡良典医師の即答には、親愛の情がにじんでいた。短い言葉のニュアンスから、地域に認知され、頼られているクリニックであることを感じ取ることができた。また、「すぐ、そこです」の説明が道のりにして2km以上のスケールであったことから土地の広さを、道すがらの人家のまばらさから人口密度もイメージできた。

どんな地域で始まった試みなのか。足かけ3年でどれほど地域に貢献できている試みなのかを感じ取った上でインタビューに臨める取材となった。

夜間受け入れを象徴するスポットライト
静かに賑わう外来待合室

国道沿いに建つ総床面積700㎡の松岡救急クリニックは、夜間にはスポットライトが壁面を照らし、24時間体制で稼働している。午後5時の外来待合室には何人もの人が腰を下ろしており、受付での会話を聞く限りほとんどが再診患者のようだった。

出現したのは24時間365日の救急とともに、外来で慢性疾患にも対応してくれる至れり尽くせりの医療機関だった。松岡救急クリニックのこれまでの歩みを振り返りながら、その成功体験を交えて松岡は主張する。

「総合病院が立ちゆかなくなるのは1000床、2000床といった入院病棟を必須条件として構築するからではないでしょうか。大規模組織でたくさんベッドを抱えれば高回転型経営にしか突破口はなりません。」

回転維持に失敗すれば、職員に給与を払うのさえ厳しい経営状態に陥る。加えて、規模への安心感から救急医療への貢献まで求められ、無理をして受け入れを承諾し、さらなる苦境を招く。そんな悪循環が地域の医療を疲弊させるのかもしれない。

当院は24時間365日の救急受け入れをする医療機関でありながら、外来診療を経営の軸とした少人数によるコンパクトな運営体制をめぐらしたのが奏功しています」

論理として特段、高度とは思えない。なぜ今までなかったのか？ 「それは私にもわかりません。今までになかったという事実も、指摘されて気づいたくらいです」

誰も手がけていない新規性を見込んでの着手ではなかったのか？ 「『地域が求めているのは、こういう医療だろう』という考えをあたりにしました。運営形式の根拠は、それだけです。皆さんが思うほど事前の分析やロジカルな検討はしていないのです」



「開設当初から救急科（内科・外科・小児科）、脳神経外科、整形外科、循環器内科・リハビリテーション科を標榜し一般外来を受け入れ、順次、慢性疾患の専門外来も増設してきました。」

経営、収支については『やってみなければわからない』と、最悪のケースも覚悟してのスタートでしたが、外来診療の医療収入は最悪の想定よりもずいぶん良いものでした。半年後には、『これなら、なんとかなるかもしれない』と確信を得たのをおぼえています」

無理な注文か否か。とにかくやってみよう
「いつでも、何でも」診るクリニックを

医学や医療に何の利害関係もないひとりの人間が漠然と医療に求める理想を言葉にすれば、「いつでも、何でも診てくれるお医者さんがいてほしい」となるだろう。

医療を提供する側は、「医師には専門科というものがあるのだから、それを集めて病院としてお応えしましょう」と総合病院を提示する。「交通事故の大怪我や、急に発症した疾患への緊急対応はまた別の専門性が必要なので、それはそれで特別な組織がいりますが」と言い添えられた提示は、結局のところ「このケースは、どの専門性にも当てはまらないので、お断りせざるを得ません」といった現象を現場に頻発させてきた。

訳知り顔で「いつでも、何でもなんて、土台無理な注文なのだよ」と呟く人物は、時とともに提供側のみならず、医療を受け

「患者さんの求めるもの」を注視し、傾聴する
シンプルな原理がぶれずにある

たぶん、熱弁を好まない人物である。飄々とした語り口を崩さず、問われたことにのみ的確に答える。もの言いはシンプルであり、帰結するキーワードも数少なく、ぶれがない。たとえば、インタビュー中、ほとんどの問答が「患者さんの求めるもの」に帰り着き、行動原理の説明とされた。

「医学部入学後、これといった目標が定まらずにフラフラしていた自分が歩むべき方向を見出したのは、交通事故を目撃したからです。」

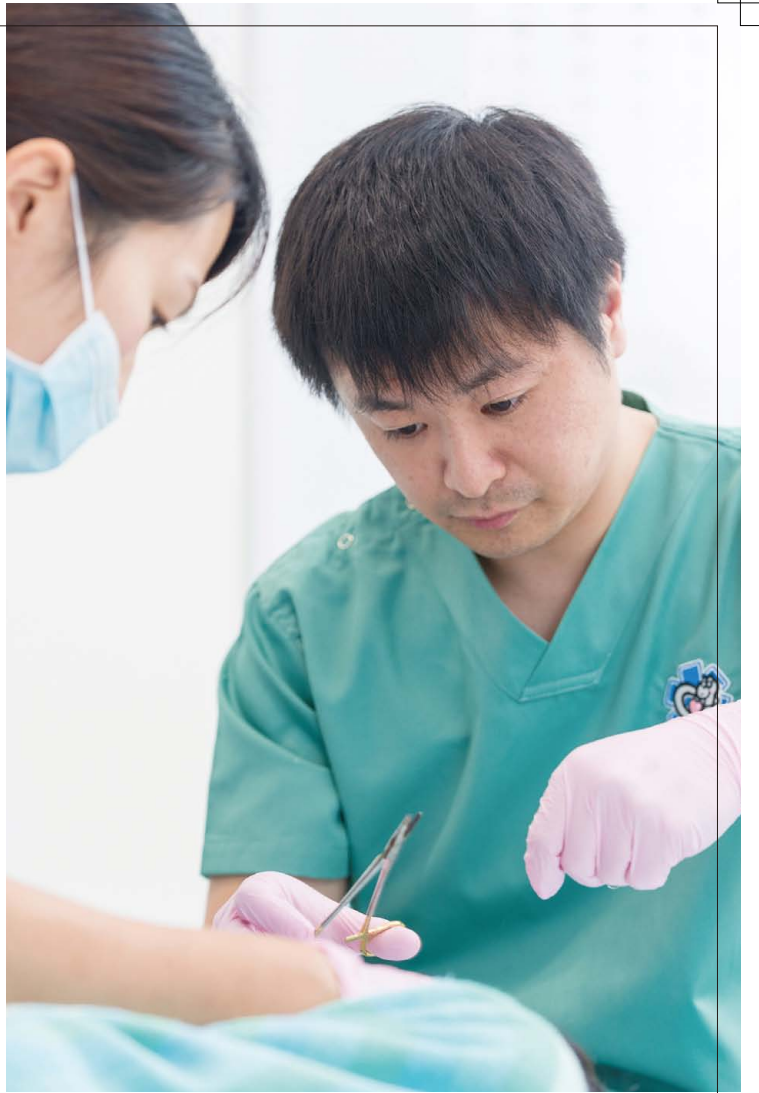
その時、血を流し道に横たわる被害者は、緊急処置をし、緊急手術をしてくれる医師の到着を願ったはず。そうなるこそ医師だと、天啓のような理解が降りてきました。

大学医局で講師職を得た際、この後に教授職を頂点にした管理職の道のりが待っているとイメージし、臨床の現場から遠ざかることで患者さんたちの求めるものから遠くなっていく自分を否と考えました。それが、私を開業の決意に導きました。

南九州市は、人口が減り、高齢化が進み、医療機関が少なく、救急車は1時間かけて鹿児島市に患者を運ぶ地域だと聞いていました。では、この土地で医療を展開するとしてらどうか？ 地域の方々はどうな医療を望んでいるのだろうか？ と考えてみて、はじき出した答えのひとつが今の当院の姿です」

もちろん思いつきや出会いだけで紡いだ物語ではない。構想を実現するには有床クリニックであることが必要であったため、県から特例診療所の認可を得なければならぬ。もちろん、救急告示の指定も必要だ。取得のために2年の時間を費やし、書類を





取材を中断し、急患の創傷への対応。手技を操る局面での、瞬時の集中力に圧倒される。

提出して面接をこなした。

16列マルチスライスタイプのCTや0.3テスラのオープン型MRIを導入し、放射線技師を雇用する体制づくりのためのリース契約も含めて4億円の借り入れも決めた。

「借財の大きさには、正直気が圧されました。経営に行き詰まったらひどいことになる恐怖が、なかったとは言いません。

でも、救急患者を速やかに検査し、治療の方向性を確定するために絶対に必要な設備ですから、導入は必須でした。

この開業へのアプローチは、人生を賭けるに足ることだと確信していたので、怖くはなかったですね。やってみると、リース契約以外の借り入れは、2年半で目途がつかまりました。」

「かかりつけ医であり、救急医である胸を張って地域の願いをかたちにする」

松岡は、麻酔、救急、集中治療を中心に、全部で8つの専門医資格を取得している。救急医の修行を重ねるなかで、専門分

「決して断らない」を実践して芽生えた信頼は地域に、救急隊に根づく

開業時には、24時間365日休めない医師となる覚悟を決め、実行した。

「覚悟すれば、できます。幸いにして当初から収支が健全で、半年後には医師の雇用も叶い、現在では週に3日の休日をとれるようになりました」

開設時に明示した方針は、「決して断らない」。

「開業以来ここまで、1件も断らずに診療を続けていますし、救急を受け入れています。すると何が起るのか。地域に、「困ったら、松岡に行け」という言葉が聞こえるようになりました。

また、救急隊が信頼してくれるようになりました。現在では、実質的なホットラインとなっている当院の携帯電話の番号に、救急隊が直接入電してくれるようになっていました」

「都道府県庁と連絡を取り合い全国への水平展開を構想」

同院は現在、経営が安定するとすぐに設立した医療法人EMSとして活動。同法人の枠組みのもと、松岡が南九州市で



救急隊からの入電は、すべてこの携帯電話に(上)。救急処置室の様子。奥の扉が救急車からの搬入口(下)。

若手医師へのメッセージ

少なくとも臨床を志す方には、「患者さんのためになつていくか、患者さんの求める医療を提供できているか」の自問は有用だと信じます。歩むべき道筋を照らし出してくれます。研究を志す方とは道筋が違うかもしれませんが、信念をぶらさない点で共感できれば有益な交流ができるかもしれませんね。いずれにしろ医師を志す方はすべからず理想を持つはずで、理想に燃え、信じて歩む日々には艱難辛苦もあるでしょう。くじけずに、ぶれずに医師人生を進むことを願っています。

野を持たない救急医は他科医師への説得力を持ってない医師だとわかつたので努力したという。

「資格取得の道のりは寝る時間も惜しみ、身を削るという表現が当てはまる日々でしたが、『患者さんを救える医師になりたい』という理想の実現のために必要なことですので、苦にはなりませんでした」

その努力は、もちろん今に生きている。

「救急を担える医師は、広く深くに精通した万能プレイヤーでなければなりません。セクションとしての救急を、広く浅くの代名詞のように語る風潮がありますが、それと混同してほしくないです。

いつでも、どんな患者さんでも救えるという自信を携えるために、人より数倍、数十倍の努力が求められます。厳しい道のりです。しかし、たどり着くと得られるものがとても大きい。ぜひ、多くの人に救急医療にチャレンジしてほしいと思います」

松岡は開業当初に受けたいくつもの取材に対し、「断らない救急」と「ひとり総合病院」なるキーワードを示して理解を求めた。

「救急医療と慢性期医療の組み合わせは相反していると感じる方も多くいらつしやるようですが、私の中では何の矛盾もありません。地域の皆さんが、その時々々の事情に応じて必要な医療がほしいのは当然のこと。すべてが一方所で手に入るなら、これほど助かることはないはずですよ。

そういった医療を受ける側の願いよりも、医療提供者の事情を優先して、患者さんが我慢したり努力したりするのは変な話だと思ふべきでしょう。

私は、胸を張って、地域の皆さんのかかりつけ医であり、同時に救急医だと自称しています」

2015年には通所リハビリテーション施設の併設が実現した。今後はさらに、慢性疾患の発症予防にも力を入れていく考えだという。

確立した運営ノウハウを全国展開し始めている。2015年には山口県に、2016年には埼玉県、千葉県にクリニックを開設することが決まっている。

「当院の仕組みは、我ながら的を射ていたと実感した次の瞬間、水平展開の構想が生まれました。

これが唯一の策などと慢心はしませんが、日本中で叫ばれる地域医療再構築の一助になれるはずだと自信を得ています。都道府県庁の地域医療整備課と連絡を取り合い、全国の、求められる地域に出て行くこうと考えています」

この医師との会話が爽快なのは、ひとえにすべてが実践者の言だからだ。その口から、批判や評論は漏れてこない。その間があるなら、すべきことを考え、行動する。すべきこととしたことに関する言葉ばかりが溢れてくる会話は、よどみもなければ外連もない。

医療は国民生活の一大事であるから、大所高所からの議論も大いに必要だ。しかし、議論と理論に突破口が必要な局面も必ずある。鹿児島県南部で黙々と実践され、検証された方法論がここにある。関係者のみならず、耳目をそばだててみてはいかがだろう。